

伝統の力・芸能の魅力

～「芸能を媒介にした地域づくり・交流事業」を通して～

上越教育大学 玉村研究室

玉村恭、徳永好花、大島理紗、田中鈴乃、山田結花里、小島直樹

佐渡の芸能文化の大きな特徴の一つは、芸能が人々の生活に根付いている度合いが高いということである。人々の間で「生きたもの」として芸能が営まれているこの環境は、それ自体が地域づくりの種なのではないか、島に人を呼び、人々に多くのことを考えさせる、ある種の「起爆剤」となり得るのではないか。そのように考え、佐渡の芸能の「そうした側面」が感じられるような合宿・研修活動を企画した。

活動に参加した学生たちは、この事業に関わったことを通して「伝統の力」とは何か、芸能の魅力とは実際のところどのようなものなのかということについて、深く考え、踏み込んだ理解を得た。このことは、佐渡の芸能文化が島を訪れる人に、芸能について、文化のありようについて、そして地域のこれからについて、根本から考え直すことを促す力を持っていることを示している。

活動の概略

7月28～30日の三日間、椿尾集落にて合宿研修を行った。椿尾集落には特異な芸能の文化が存在する。集落の中に能舞台があり、能を演ずる場を提供してただけでなく、集落に暮らす人たちも自ら謡を謡い、舞を舞う文化を持っていた。このような環境の中で、能舞台での実技研修と、集落の人々と交流する事業を企画し、実施した。

一日目は直江津港から出発して小木港に到着し、椿尾集落に入った。「椿尾集落開発センター」を宿に使わせて頂き、食事の用意や寝泊りをそこで行った。氣比神社の境内にある能舞台でたっぷりと実技研修を行い、三日目の発表会に備えて稽古した。お風呂は集落の方に貸して頂いた。何件かのお家に入らせて頂いたが、食べ物や飲み物を振舞って下さったり、佐渡おけさの三味線を教えて頂いたりもした。

二日目は集落を案内して頂いて石切り場の遺構を見学したり、石工の職人の方のお話を聞いたりした。また、車で島内をまわり、大膳神社（竹田）、牛尾神社（新穂潟上）、加茂神社（栗野江）、諏訪神社（潟端）の能舞台を見学した。佐渡の能の歴史についてのレクチャーも受けた。昼食会は集落の婦人会の方々が手料理を振舞って下さり、さらにその後は佐渡おけさを手ずから教えて下さった。夜はバーベキューも行い、地域の方々とたくさん話すことができた。

三日目は午前中に宿根木公会堂で鼓童の公演を参観した後、能の発表会を行った。

暑い中、集落の方々がたくさん見に来て下さった上に、終演後にはともに佐渡おけさを歌い、踊って下さった。質量ともに、非常に充実した三日間だった。

伝統は不変か～能舞台から見えてくる伝統の姿とは？～

伝統芸能に対しては、「今日まで不変のまま受け継がれてきた」というイメージがつかまとう。だが、これは本当なのだろうか。私たちは、佐渡での活動、特に能舞台を訪れる中で、この疑問に対する重要なヒントを見つけたように思う。

私たちがお世話になった椿尾の氣比神社の能舞台は、独特な構造をしている。橋掛かりが、一般的なそれに比べて非常に短く、その上、神社の本殿に直接繋がっているのだ。他にも活動期間中にいくつか能舞台を見学したが、それらはどれも橋掛かりの形態（長さや舞台と接続する角度など）が違っていた。

なぜこれほどまでに佐渡に残る能舞台は個性豊かなのだろうか。それは、能舞台としての機能や格式を、現実の制約と折り合いを付けながらどう守るかという挑戦の跡と考えられるのではないだろうか。例えば、椿尾の舞台の橋掛かりはもともと能舞台に付属しておらず、2012年に地域活性化の機運の中で増設されたものだった（実は、上越教育大学が初めて椿尾の能舞台でお世話になったのも2012年）。

伝統とは、不変のまま受け継がれるものでは必ずしもなく、いつの時代も、常に現実との折り合いの中で守られ、発展していく、そういうものなのではないだろうか。

伝統とどう付き合うか

私たちはこれまで伝統芸能に対して、「敷居が高い」「難しい」などのイメージを抱いてきた。だがこの活動で能に取り組み、詞章を読み解いたり、仲間と一緒に合奏したりして、また、集落の皆さんが熱心に発表を見て下さったり、一緒に踊ってくれたりした経験を通して、芸能とは「楽しむ」ものだということを、身をもって感じた。

実際、お話を伺うと、椿尾のお母さんたちは一時期、能を「楽しみ」の一環として、仲間と一緒に行っていらした。そして、彼女たちの「楽しみ」は、一時期は能を、一時期は日本舞踊を、というように、流行があったということも教えられた。椿尾のお母さんたちは、「趣味」という、非常に身近なものとして芸能を生活の一部に取り込み接していたことがわかった。

そこで改めて考えなければならないのは、今後私たちは「伝統」とどう付き合っていくべきかということだ。「日本文化を代表するもの」としての能を守っていかなくてはならないことは当然のことだが、「守っていく」という姿勢・考え方だけで本当に良いのだろうか。むしろ、「楽しみ」「趣味」としての能、つまり芸能を身近に存在するものと捉えるという考え方も必要なのではないだろうか。

個人的には、「趣味」として身近に存在する伝統芸能のあり方が素敵だなと思ったので、そういった方向性でも、これから伝統芸能が残っていけば良いなと思った。